

二里ヶ浜の秘密を探れ!!! (2)

—地域教材の開発と活用「地理探訪フィールドワーク」—

【研究代表者】山神達也（和歌山大学教育学部）

【共同研究者】山口康平（附属中学校）・海津一朗（和歌山大学教育学部）

【オブザーバー】鈴木達也（和歌山大学教育学部）・平田秀一（西脇中学校）・川嶋里枝（附属中学校）

【活動の概要】和歌山大学教育学部附属中学校社会科では、本学の海津ゼミ（日本史）と共同で歴史探訪フィールドワークを実施しており、今回が 14 回目となる。昨年度からは地理学ゼミの山神が加わり、歴史的視点に加えて地理的視点からも地域を体験・観察することとなった。かかる経緯により、本研究課題は、「地域教材の開発と活用「歴史探訪フィールドワーク」」（研究代表者：海津）と共同で実施した。対象地域を磯ノ浦周辺に設定し、地域教材「二里ヶ浜の秘密を探れ!!!」を作成した。2019 年 1 月 26 日（土）にフィールドワークを実施し、教材を作成した案内役の大学生 22 人、附属中の生徒 3 人、オブザーバーの先生方 3 名が参加した。

本実践研究課題は、「地域教材の開発と活用「歴史探訪フィールドワーク」」（研究代表者：海津）と共同で実施したものである。海津による報告「二里ヶ浜の秘密を探れ!!! (1)」を受け、本報告では、地域教材を作成し、当日のフィールドワークで案内役を務めた本学学生の感想・反省を整理したのち、本課題での成果と課題を整理する。報告書上は二つに分かれたが、一連のもののご理解いただきたい。

1. フィールドワークで案内役を務めた学生の感想・反省

今回のフィールドワークでは、本学教育学部の 2 回生・3 回生を中心とする学生 22 名が地域教材を作成し、現地案内役も務めた。以下に学生の感想・反省を整理するが、文意を損ねないように報告者が抜粋・要約したものである。なお、丸囲みの数字は担当した学習活動（海津報告書の 2 章を参照）を示す。

1.1 地域教材の作成を通して学んだこと

山室達哉（3 回生、①）：このフィールドワークを行うにあたり、半年前から様々な準備を行った。準備を進める中で、フィールドワークを作ることの難しさや面白さを感じたことに加え、私自身が身近な地域に潜む地理や歴史の興味深さに気づかされた。今回学んだことは、教員になって地域学習等を行う場面で、存分に発揮したい。

佐郷周平（2 回生、①）：資料を作るにあたって、中学生にとって見やすいものに行う場面で、存分に発揮したい。学校の授業での知識を使ったモノとフィールドワークでしか実感できないモノとの二方面からのワークを用意したことがよかったと思う。地形図で等高線を読めば二つの山の高さが 10m 違うことが分かる。そして実際に山を見れば 10m の違いがこんなにあるんだと体感できる。教室の授業でも何かを体感できるような授業をつくりたいと感じた。

松元佑介（3 回生、②）：教師が興味深いと思える題材でなければ、生徒の気持ちは動かない。そのために、教師は丁寧に題材を選び、教材研究をしなければいけない。その中で伝えたい知識・考え方を具体から抽象の形で伝えていけるかがポイントだと感じた。資料作りでは、最も伝えたい情報をコンパクトにまとめることが大切である。調べた情報を漏れなく書いてしまうと、生徒は何が大切なのかを判断しづらくなってしまふことを体感した。

福田智也（2 回生、②）：当初は、埋め立ての経緯を概観したのちに、堤防について細かく整理するつもりであった。しかし、堤防の調査を進めると、何年に作られた程度の情報しか得られず、堤防にあった陸間が中心的内容になってしまった。これは私の調査不足と、堤防についての知識不足、資料があるはずという想定のおかしさが招いたものであり、資料作成の難しさを実感した。ただ、現場にあった陸間については、その役割や現在の状況まできちんとまとめることができたと思う。実物に関する資料を作れたことは今後に生かしていきたい。

篠藤和幸（2 回生、③）：教材作成で難しいと感じたのは、まず、調べ学習を深めていくことだ。自分のテーマは「住金」であったが、ホームページ以外になかなか資料が見つからず、そこが苦勞した。次に、構成をどうするかだ。内容を取捨選択していくなかで、何が必要で何が不要なのかの構成が難しく感じた。一方で、調べ学習の面白さを感じた。今回、住金が和歌山市の発展に寄与していることを知った。これは住金工場の周辺人口からもうかがい知ることが出来た。このような「知っていく」ことの面白さをこの過程を通じて知った。

吉田亮介（3 回生、③）：ワークシートが説明的になってしまった。ワークシートは穴埋めなどを作っていたが、何か

- を体験するような活動を取り入れたほうが、生徒の興味や関心を引くことができると考えられる。自分たちが伝えたいと思っていることが伝わりきらないワークシートになってしまった。
- 中岡 滉 (3 回生、④)：地域教材を扱う授業を通して学んだことは、多角的・多面的に学ぶことの大切さである。地域教材は、さまざまな観点からその地域を考慮ことや、同じ事象でもさまざまな人の視点から考えていくことが容易であることを、実際に感じる事ができた。また、地域学習はフィールドワーク等が行いやすく、見学・体験や地域の方々の生の声を聞くチャンスが多いため、これを効果的に活用していくことによって、生徒の主体的で深い学びに繋がるということに改めて感じた。
- 樋口恭平 (3 回生、④)：全体での下見がなく、また強制されることがなければ、下見には行っていなかったと思う。しかし、下見したことで、現地であれば気付くことができないものが多いことが分かった。現地に行くことができるのならまず行くべきだという事を再認識した。住金の工場による公害について、大気汚染による健康被害や日常生活への影響は予想できたが、身長低下といった身体の成長にまで影響を及ぼすことは知らなかった。この授業がなければ、緩衝緑地についても、作られた経緯やその役割をすることもなかった。
- 川崎貴人 (2 回生、⑤)：地形環境の歴史と塩づくりの様子を知るための文献探しとそれを読み込む作業が長く続き、内容を把握するのに苦戦した。また、難しい書籍ばかり読んでおもしろくない説明になりかねないため、わかりやすいホームページなども参考にした。「伝わらなければ意味がない」という考えにシフトしたのである。今回の資料作成での試行錯誤は、子どもに何かを教えるという職業を目指す上で重要な経験になったと感じる。「誰に・何を・どのように」伝えるかを考えることが、良い資料・良い授業につながることを実感した。
- 小林貴紀 (2 回生、⑤)：相手が中学生ということもあり、大学生が調査したことで大切な内容や教えたい部分に絞って、どれだけ簡略化して説明できるかが1つのポイントだったと思う。その点で、資料は生徒が読み疲れたり飽きたりしないように工夫することができたと思う。内容については、「実は附属中は砂丘上にある」と説明したときに驚いて興味をもってくれていたので、やはり身近な話を交えることで生徒の関心度も変わってくると感じた。ただ、生徒にわかってもらえるような説明をできなかった面があった。
- 岡本和真 (3 回生、⑥)：今回の授業を通して地域に隠れた歴史や生活の様子などが明確になった。また、実際に現地に赴くことで新たな発見もたくさんあった。加えて、中学生相手に授業をするということで、生徒が話を聞くだけのつまらない時間にしないよう、生徒の興味関心をひくような工夫をワークシートや解説中に組み込むことの重要性を痛感した。⑩の「歴史を探ろう」のチームが六地藏を探させようとしていたことや寺内にある石造物の文字を実際に解説させていたことは、生徒の興味関心を十分に引き出せていたように感じた。
- 合田和史 (3 回生、⑥)：身近な地域を教材とする利点を感じた。一つ目は、生徒の興味を引きつけ、主体的に学びに向かう姿勢を育成できる点である。通常の教科書の学習と比較して、親近感を抱きやすく、問題意識の設定が容易である。二つ目は、これまでに学習したことを応用し、実際の生活等に反映させることが可能である点である。地域を教材として活用することで、これまでに学習した歴史や地理などの内容と関連づけ、より深い理解を期待することができる。このような利点を踏まえ、地域教材を適宜取り入れていきたい。
- 西涼太朗 (2 回生、⑦)：埋め立てに反対して行われた住民運動に焦点を絞った。住民運動について調べていくと、単純に埋め立てに反対するだけでなく、漁協や自治会幹部と一般住民との対立が混ざり合うという複雑な経緯が判明した。こうした経緯から、「磯ノ浦になぜ砂浜が残ったのか」という問いに答えることに非常に苦心し、時間を要した。また、重要だと思うことを挙げていくと情報量が膨大で難解なものとなり、到底中学生に理解できるものではなかった。要点を残したまま簡潔なものにするという作業も大変苦労した。
- 西浦 諒 (2 回生、⑦)：二里ヶ浜周辺に住んでいるため、今回のフィールドワークは刺激的な内容であるとともに、私の祖先がどのようなことをしていたのかを調べるようなものであるように感じた。今回新たな発見となったのは、地籍図と『和歌山の公害』である。また、事前に調査していく中で、現地では積極的に語られないものがあるということを知った。中学生にもわかる内容にすることは、とても難しいものであった。具体的過ぎては内容が濃すぎるし、わかりやすくすると伝えたいニュアンスが消えてしまうからである。
- 平田直輝 (3 回生、⑧)：教師の実地調査の必要性を学んだ。教科書に載っていることや文献などの資料を用いるだけでは不十分な場合がある。また、学習内容の繋がりを考えることで、自分たちのテーマを深めることができた。地域教材を扱う上では、地理的な内容とともに歴史的背景などにも着目し、多面的に考えていくことの重要性を学ぶことができた。教師がその地域で調査を行い、その経験を十分に発揮することによって、子どもたちに何を伝えたいのか、またどのような事を発見してほしいのかを考えるきっかけを作ることができると思う。
- 南方宏紀 (3 回生、⑧)：準備段階ではレジュメの作り方のイロハから学んだ。当初は大学生向けのレジュメのようなものを作ったが、それでは中学生が理解できないことに気づき、修正を加えていくこととなった。また、事前調査を進めるなかで、インターネットや図書館などでは調べのつかないことが存在し、役所の人や地域の方々にインタビューするなどの方法でも調査を進めた。このように、対象を把握してそれに適したものを作ることや、インターネット・文献以外の様々な調査方法を取り入れることなどを学ぶことができた。
- 野中真右 (2 回生、⑨)：防災のテーマでは中学生に共助と自助の重要性を伝えたいと思い、自主防災組織を中心としたレジュメを作成することにした。レジュメ作成にあたり、さまざまな情報を集める必要があり、関係各所に問い合わせたが、なかなかほしい情報にたどりつくことができずに苦労した。レジュメの作成を通して情報を集めることの大変さを知ることができた。加えて、中学生の学びに繋がるレジュメを作成することの難しさも感じた。本当に伝えたいことを、簡潔にまとめる必要があったからである。
- 鈴木皓宣 (3 回生、⑨)：現地を歩いて自分の目で確認することの大切さを感じた。避難の担当であったが、防災マップなどではわからない細かな点(道幅や照明の数など)を見ることができた。自治体などが作った資料はわかりや

すいが、それは補助的なものとして、実際に歩いて気づいたことを子どもたちに伝え一緒に考察していく方が、子どもたちにとってより面白い教材になるのではないかと思った。また、現地の方から情報をいただく大切さも学んだ。現地の方々の声を反映させることで、よりリアルな情報を提供することができるからである。

曾我部翔馬 (2 回生、⑩) : 「身近な地域の調査」でどのような準備が必要かを学んだ。歴史を担当した私は、石造物を調査する方法を二つ学んだ。一つは拓本、もう一つは片栗粉をつける方法である。今回は、実際に子どもたちに見せることはしなかったが、より歴史を実感してもらうために、この方法をその場で実践するのもいいのではないかと思った。また、準備として、拓本をとった紙や石造物に刻まれている文字を解読し、理解しておく必要があった。加えて、現地の方とかかわりを持つことで、その土地の細かい歴史などを感じ取られることも学んだ。

山村恭平 (4 回生、⑩) : 歴史をテーマとしたが、中学生が思うような教科書的な歴史ではないため、学習内容がっかりしないか心配であったが、そこは開き直って、「教科書にも載ってない!」「身近な地域の歴史を調べるにはどんなことがあるのか!」という方針で進めることにした。一方的に伝える内容が多くなるため、授業的にどうかとも考えたが、知らないことを知れるのは面白いということを前面に押し出した。ただ、事前の現地での聞き取り調査が不十分だったのが反省点である。

高野進太 (3 回生、⑪) : 今回のフィールドワークを通して、現地で調査をし、地域の人とつながることの大切さに気付くことができた。実際、調査を進める中で、現地に行かないと分からないことや、現地の人に聞いて初めて分かったことがあった。私自身は神社の宮司さんにインタビューを行ったが、実際に聞かないと分からないことばかりであった。また、フィールドワークを通して、ネットや文献を調査しているだけでは知ることができない情報を得ることができた。これが地域の人とつながって得ることができると感じる魅力だと感じた。

藤田智也 (3 回生、⑫) : 教材研究のさい、現地で話を伺うことの重要性を学んだ。最近ではインターネットが発達し、必要な情報をすぐに調べて知ることができるが、神社などの長い歴史を持つものを調べる際は、実際にお話を伺うことで得られる情報の質と量が全く異なるのである。生の声を聞くことで、本やネットではわからないことや裏話、実情を聞くことができ、新たな視点を獲得することができる。また、実際にお話を伺いにいくことで、その地域の人と関係を持ち、授業に協力をしてもらえる可能性があることに気づいた。

1.2 フィールドワークを実施しての感想

山室達哉 (3 回生、①) : 案内役の大学生の多くが早口になっていた。また、学生側は他班の説明との関連を理解できていない面があった。一方、中学生は参加者が少なく緊張気味だったことを受け、学生が声かけする場面が多々見られた。その結果、フィールドワーク終盤では、中学生の積極的な発言があり、楽しい会話もできた。

佐郷周平 (2 回生、①) : 中学生の参加者が少なく、無理に話しかけなくてもいいやと思ってしまった。途中で頑張って話しかけると、楽しく話すことができたので、話しかけてよかった。中学生に喜んでもらえてよかった。

松元佑介 (3 回生、②) : 悪天候の中、生徒の集中力の持続が困難であったこともあるが、学生が一方的に説明する場面があった点を改善すべきと考える。せっかく学校外で活動しているので、生徒自身が与えたヒントから実際に目で見て、繋がりが理解できる喜びを与えられるような学習内容を提示できればいいのではないかと感じた。

福田智也 (2 回生、②) : 他のテーマとの関連付けがうまくいかなかったことが反省点である。また、悪天候によるルート変更があり、現場を見て考えるという学習活動を実施する機会が失われてしまった。学校外で行う授業には事前の準備、予測、想定外への対応が重要であることを実感することができた。

篠藤和幸 (2 回生、③) : 悪天候ではあったが、フィールドワークを行うことでしか得られないものが多く、有意義なものであった。例えば、その地域の方に話を伺うのは、生きた資料であり、とても有意義な時間であった。また、歴史班の石碑を調べる活動では、実際に見て触れることにとっても意義があると感じた。

吉田亮介 (3 回生、③) : お寺の手水鉢に刻まれた文字を解読させる学習活動がよいものであった。生徒がこれは何だろうという疑問を持つような問いを投げかけて、興味をひくことが重要だと思った。また、地元の自治会長の方にお話を伺う際、大学生は事前に質問を用意しておいた方がよかったと思った。

中岡 滉 (3 回生、④) : もう少し分かりやすい言葉での説明や、わかりにくく止まってしまった生徒に対して早め早めの手だてを行うべきであったと感じた。また、中学生自身が活動を行うことの大切さも感じた。加えて、地域の方にお話を伺うことができ、良い機会になった。このような機会を教職に就いたあとも作っていきたい。

樋口恭平 (3 回生、④) : 今回は学生の方が多く、車が通るときなど誰かがすぐに声掛けできたが、実際に中学生を引率する場合はそうはいかないので、自分が周囲に気を配らないといけないなと思った。天候が悪く、発表をするのも聴くのも大変だったが、参加者が体調を崩さなければいいなと思った。

川崎貴人 (2 回生、⑤) : 中学生のとなりで一緒に考えるというフォローを 3 回生が担ってくれたため、中学生から発言が出やすい状況が徐々に生まれていった。また、ポイントとなる部分で考えてもらう時間を確保することで、中学生が自分で考えて理解できたというプロセスを辿れたことに手ごたえを感じ、うれしかった。

小林貴紀 (2 回生、⑤) : 歴史班はハイレベルなことも話していたが、かみ砕いてわかりやすく説明していたため、生徒も興味を示していたのだと思う。また、改めて生の声を聴くことのよさを感じた。生徒にどう説明したらよいのだろうと考えるよい機会になったと思う。

岡本和真 (3 回生、⑥) : 自分の興味のある「漁業」を担当したため、全体を通して楽しかった。また、生徒の興味関心を引くため、シラスを天日干しする台に触れたり、貝や魚の簡単な説明を取り入れたりしたが、効果が出たかどうかは分からない。また、天候が悪化したため、予定していた解説の一部を省略したことが少し悔やまれる。

合田和史 (3 回生、⑥) : 実際に中学生に説明することを通して理解が深まった。目的をもって活動し、見通しをもって計画を進めていくことの重要性を理解した。また、雨具の着用や持参を再度確認する必要があった。さらに、現

地は海峡的地形により雪雲が滞留していたため、地形と気象を関連づけた説明も有効であったと感じた。

西涼太朗 (2 回生, ⑦) : 悪天候のため、予定していた景観を観察しながらの説明ができなかった。レジュメが簡潔に過ぎたかと心配したが、中学生向けという点では適切であるという感想をもった。また、身近な地域を見つめなおすことの面白さを知った。来年度に教育実習を控えた私にとって、非常によい経験となった。

西浦 諒 (2 回生, ⑦) : 天候には恵まれなかったが、現地で語ることの意義を感じた。また、埋め立て反対運動における地区間の温度差を感じた。そのなかで、地元の方にお話を伺う際には、事前に話し合っただけで話題を用意しておく必要があったと感じた。加えて、色々な立場の方からお話を伺うことの必要性も感じた。

平田直輝 (3 回生, ⑧) : 自分たちで調べて獲得した知識だけでなく、現地の方々の生の声を聞くことで得ることのできる知識も数多くあると感じた。反省点として、子どもたち自身が考えて、発見していけるような発問をできなかった点がある。子どもたちが主体的に学ぶことのできるような学習活動を考えていかねばならない。

南方宏紀 (3 回生, ⑧) : ワークシートへの書き込みは面倒で邪魔くさいと感じた。集中を向けるという意味で穴埋めは有効だが、机のない状況では極力少ないほうがよいと感じた。また、長い説明は生徒の集中力を削ぐと感じた。フィールドワークでは、後半に興味を引くような内容を用意しておく必要があると思った。

野中真右 (2 回生, ⑨) : 気づいてほしいことに気づいてもらうのは難しいと知った。避難場所までの道中で気づいてほしいことがいくつかあったが、ヒントの出し方がうまくいかず、ほぼ答えを中学生に話していた。また、歴史班はそのテーマについて楽しそうに話していて、見ているほうも興味をもって聞くことができた。

鈴木皓宣 (3 回生, ⑨) : 一問一答の知識を与えるのではなく、生活していく上で大切なことを問いかけることができた点がよかった。しかし、避難経路を歩く際に中学生を先頭にしなかったことなどは反省点である。歴史班のとき、できたこと・わかったことの楽しさ・嬉しさが中学生の顔に現れた瞬間があり、この瞬間の大切さを知った。

曾我部翔馬 (2 回生, ⑩) : どの場所でどのような説明をするのか・どのような学習をさせるのかをしっかりと構想しておくことの大事さを学んだ。また、生徒に主体的に学んでもらうにはどのような活動が効果的かを学んだ。ただ単に説明をするだけにとどまらず、生徒に考えさせるなどのひと工夫が必要であると感じた。

山村恭平 (4 回生, ⑩) : 不器用なりに率直に正直に歴史を学ぶ方法や面白さについて熱意を持って伝えた。人数が少なかったこともあり、各生徒と視線を合わせて説明することができた。ただ、もう少し器用に伝えたかった。早口になったからもう少しゆっくりできたかと思う。一方的に伝えただけとなり、理解してもらえたか心配だ。

高野進太 (3 回生, ⑪) : どうすれば興味・関心を持ってくれるかが難しい所であった。獲得した知識をそのまま生徒に伝えても興味を持ってくれず、伝え方という部分で工夫が必要だと感じた。また、学校と地域との連携の必要性を考えると、フィールドワークの経験を大学時代にできたことは非常に貴重なものだと思う。

藤田智也 (3 回生, ⑪) : 担当箇所が神社という難しい場所だったため、生徒が退屈しないか心配していたが、思ったより反応が良かった。これは、フィールドワークの終盤で、生徒達とも打ち解け、距離が近くなったことが要因と感じる。内容以前に生徒達との関係を上手く構築できていれば、興味・関心を持たせやすくなると実感した。

2. 和歌山大学教育学部附属中学校からの参加者の感想

今回のフィールドワークには附属中学校から 3 名の生徒が参加し、そのうち 2 名から感想を得ることができた。以下に生徒の感想を掲げる。

生徒 A : 和歌山にも公害が起きていた事を知り驚いた。1975 年に、工場立地法で一定規模以上の会社には緑地をつくる義務がある事を知って公害を再び起こさないという事を分かった。住民運動によってダムは造られなかったという話はニュースなどで聞いた事があったけれど、実際和歌山でも住民運動があり、海の埋め立てを止めた事があったと知り、自分たちは和歌山出身なのに、和歌山の事について知らない事がたくさんあると思いました。

生徒 B : フィールドワークに参加して、神社にオリキャラがいたこと、片栗粉で字を調べることで、堤防の跡が多かったこと、大気汚染と身長が関係したことなどにおどろきました。天気が寒かったし、最初は「女の人が少ない、いややなー」と思っていたけど、大学生が優しく接してくれて内心安心していました。今思うと行って損は無かったと思っています。本当にありがとうございました。

3. 本実践研究課題の成果と課題

本課題の成果と課題は「1. フィールドワークで案内役を務めた学生の感想・反省」と「2. 和歌山大学教育学部附属中学校からの参加者の感想」によく現れている。以下では、これから教員となろうという学生が何を学び、どのような課題が残ったのかを整理する。

まず、フィールドワークに向け、どのような準備が必要かを学んだことが挙げられる。この企画では、教員側でフィールドワークの大枠を定めた後、学生と協議しながら細部をつめた。フィールドワークをただの名所巡りにしないためには、テーマを定め、ストーリー性を持たせて現地の各案内ポットを回らなければならない。しかし、各案内スポットを巡る順番が、歴史的な時系列やストーリー展開に沿わない事例が数多く発生する。したがって、各案内スポットで説明する内容を考えるだけでなく、どういう経路で進み、どういう順番で何を説明するのかを考えなければならない。つまり、フィールドワークを

実りあるものにするためには、フィールドワーク全体の内容をどう構成するのか、それを踏まえて各案内スポットでの説明内容をどう構成するのか、を練り上げていかなければならないのである。この点について、1.2の合田③や曾我部⑩の記述があり、「フィールドワークを作ることの難しさや面白さを感じた」(1.1山室①)という感想につながるであろう。

次に、地域教材を作成していく過程でさまざまな学びを得たことである。順にみていくと、フィールドワークの下準備として、文献や史資料、インターネットなどで各種の情報を収集しなければならないが、その情報収集に苦労した学生が多く(1.1福田②、篠藤③、野中⑨)、この経験そのものが貴重である。また、収集した情報をどう取捨選択するかに苦労したという感想が多く、それらは「誰に・何を・どのように」伝えるかを考えることが、良い資料・良い授業につながることを実感した(1.1川崎⑤)という感想に要約される。学生として学んだことをどう中学生に伝えるのか、生徒が興味関心を持つ資料とはどのようなものかを考えて、教材作成を工夫することの重要性を学んだのである。

また、地域を題材にすることの利点について理解を深めた点が挙げられる。教科書で直接的に取り上げられることのない題材について、教科書の内容と関連させながら、現地で直に確認・体験することの重要性が、多くの感想で指摘されている。また、地域について理解を深めるためには、地理的な観点や歴史的な観点だけではなく、公民分野や理科など、科目・教科の枠を超えて考える必要があり、「多角的・多面的に学ぶことの大切さ」(1.1中岡④)を学んだという感想がある。加えて、フィールドという特定の地点であるからこそ具体的に考えることが出来ることから、「親近感を抱きやすく、問題意識の設定が容易である」(1.1合田⑥)という利点が挙げられた。この点と関連し、現地で生の声を聞くことの重要性が多く指摘されたが、そのなかで、「現地では積極的に語られないもの」があり(1.1西浦⑦)、「いろいろな立場の方からお話を伺うことの必要性を感じた」(1.2西浦⑦)という指摘は重要である。今回のテーマのひとつに公害があったが、住金に隣接する松江地区と若干離れた磯ノ浦地区とでは、公害の程度に違いがあったかもしれない。また、住金関係者のなかには公害について語りたがらない人もいるであろう。ひとつの事象でも、状況が変われば受け止め方も語り方も異なるのである。その点で、地域学習では、立場を代えて考えてみるという問題設定が実施しやすい。地域の方々のもつ情報は現地に足を運ばないと得られない貴重なものであり、その重要性を理解した上で、様々な立場から様々な意見があることを知ったことは、このフィールドワークの大きな成果であろう。

このフィールドワークでは、歴史班(⑩、山村・曾我部)に対する評価が高かった。歴史班では、担当者が熱意を持って解説していたことや、石造物を観察して文字を読み取るという学習活動に中学生が熱心に取り組み、読み解けたときに嬉しそうな楽しそうな表情が現れた瞬間があったこと(1.2鈴木⑨)に対する印象が強かったようだ。解説・授業を実施する側が熱意を持って楽しそうに話すことで、聞き手・生徒も熱心に耳を傾ける面がある。そして、生徒側が主体的に考えることを通して何かを知った、分かったという喜びが表情に現れることは、生徒側・教師側の双方にとって貴重なものである。

最後に、フィールドワークの実践面で注意すべき事柄が多く挙げられた。当日は雪がちらつく悪天候であったため、事前に雨具の用意を確認すること(1.2合田⑥)、安全面や健康面への配慮の必要性(1.2樋口④)などが指摘された。この点に関連し、当日は天候悪化に伴い、予定とは異なる行程を取ったため、学習活動が中途半端になった班があり、想定外への対応という課題が残ったと、複数の学生が反省していた。また、避難経路を歩く際に生徒を先頭にしなかったことやヒントをうまく出せなかった(1.2野中・鈴木⑩)という反省もあり、場面に応じた先導の仕方の重要性も学んだようである。

その他にも、学生の感想には多くの成果・課題が挙げられているが、紙幅の関係もあり、ここでは十分に整理しきれなかった。それらについては学生の感想に目を通していただきたい。また、今回は中学生の参加が少なかったが、教科書の内容と関連しながらも教室内の授業では得られない学びを得たようで、おおむね評価は高いといえる。ただし、より多くの中学生にフィールドワークの面白さを体験してほしいという点で、残念な面があったのは確かである。

以上のように、地域教材を作成してそれに基づくフィールドワークを実践した本実践研究課題は、中学生の参加が少ないという反省はあるものの、十分な成果を得たと評価することができるであろう。